

Title	ジョー・オルマン著 内山秀夫、喜多靖郎、宮沢健、坂本勝、柴田平三郎 訳 『創造の政治学』
Sub Title	Joe Allman (translated by H.Uchiyama, Y. Kita, K.Miyazawa, M. Sakamoto, H. Shibata). Creative
Author	根岸 毅(Negishi, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1976
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.49, No.8 (1976. 8) ,p.87- 92
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19760815-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

ジョー・オールマン著

内山秀夫、喜多靖郎、宮沢健、

坂本勝、柴田平三郎 訳

『創造の政治学』

本書は、Joe Allman, *Creative Politics* (Pacific Palisades, Calif.: Goodyear Publishing Company, Inc., 1972) を訳出したものである。

原著に私が興味をもつたのは、それが、今日の政治学には社会的関連性が稀薄であるという批判を意識し、その批判への回答として書かれた (iii ページ) からであった。本書が学生向けの入門書であるにもかかわらず私がこの「紹介と批評」欄にとりあげるのは、そのためである。したがって以下においてまず、右の文脈での著者の議論に限って内容を紹介し、それに検討を加えてみよう。

本文のはじめに、「本書は、他のあらゆる書物と同じく、著者の世界観の影響下にある」(四ページ) ということが出てくる。これは、二つの意味で本書の主張の特色を暗示している。ひとつは、著者が、いわゆる研究の客観性・価値中立性を標榜する行動論の正統

的方法をとらないことであり、他のひとつは、著者が行動論に代えてす代替案の内容である。

著者は政治研究を、それが人間の「生活に影響を及ぼす出来事について、人間がいま以上の制御法をもつ方向で貢献しているか」という観点から評価しようとする (六五ページ)。この観点は、著者が、現在を「われわれに突きつけられている数多くのむずかしいそして複雑な問題を解決するのに力をつくさねばならぬ、根本的で持続的な責任を市民全部がもっている」(九四ページ) 時ととらえ、したがって政治の研究者には問題解決のために知識を応用する任務が課されている——応用こそが研究を正当化する根拠である——と考える (九四ページ) ところから生れている。ここから著者の行動論批判は、研究の客観性・価値中立性の問題にしばられていく。

行動論的な政治研究には、政治を理解する最善の方法は客観性をもつ科学である、という隠された前提がある、と著者は指摘する (八四ページ)。この前提を受けいれることによつて行動論者には、研究を行なう上での客観性・価値中立性——研究者はとりあげる問題に深い価値関心をもつていてもよいが、それが研究に影響を与えないように配慮する必要がある (五六、九三ページ) —— が当然のこととして要求されるようになった。ところでこの客観性は、人びとに自分の生活をいままで以上によく制御する力を与えてくれるであろうか (八五ページ)、と著者は問う。

著者の答は否定的である——「客観性と科学の追求そのものは、個人が自分の環境を制御するのと逆の方向にはたらく」(九二ページ)

からである。客観性と科学的厳密さの追求は、専門性が高いことを価値が高いものとみなす風潮をつくり出し、わたしたち一人ひとりの価値判断を軽視する傾向を生む。「個々の人間は、自分たちがいちばんよいと専門家がきめてくれることを実行するだけ・・・であり、そうすることで、善いこと悪いことを決定する責任を免れる。」このようにして、生活の目標を追求する上でのわたしたちの制御能力が低下していく。(九一―九二ページ)。

著者は、行動論者が重視する客観性を、人間の制御能力の低下をもたらした主要な原因とみている。しかしこの能力の低下は、著者も指摘している行動論のほかの特徴など他の要因が合わさって作用しなければ生じえなかつたものである。行動論の政治研究は、その内容よりも方法を重視してきた、また、経験的な問題には関心を示しても規範的な問題はさけてきた(五五、五六ページ)。その結果、社会の状態を評価したり、生活上の望ましい目標について論じたりすることと無関係に、研究の方法と技法の開発を自己目的化する風潮が生れてしまった(九〇―九二ページ)。ここに、専門家万能主義がつけこむ余地があつたのである。しかしその原因がいずこにあれ、自己目的視された客観性・価値中立性が人間の制御能力の低下を生んだことが、オールマンには問題なのである。

なにを分析するかが第一に重要であり、方法は二義的な意味しかもたないとする立場に立つ(七四―七五ページ)著者は、価値中立的な研究の代りに「行動としての研究」を提唱する(九三―九四ページ以下)。そこでは研究者は、対象を他人ごととしてそれとのかかわりを絶つことは

できない。反対に「研究者は、自分が重要だと考える問題を確認し、それについての理論化を行なうだけでなく、その解決をもたらすために、いいかえれば望ましいとされる結果を生ぜしめるために、その問題にかんして行動を起」さなくてはならない(原本56ページ、以下原本からの引用はアラビア数字で示す)。対象はもはや他人ごとではない。

具体的には、「行動としての研究」では、研究者はなんらかの目標の達成を目的とする行動計画づくりに従事する。したがつて、そこでの研究の課題は、目標を達成するためのものもつとも効果的な方法の発見と、その目標が達成されることから派生して生ずるさまざまな影響の解明とになる(九五―九六ページ)。

ではオールマンは、「行動としての政治研究」に、どのような内容を盛るのであるうか。ここに彼の世界観が鮮明に現われてくる。

著者は「政治」をつぎのようにとらえている。人びとが共有する環境に変化が生じると、それが原因となつて問題が生じてくる。この種の問題では、集団としての目標とその構成員個人の目標とが対立することが多い。したがつて、それに対応して人びとが解決策を講ずるとき、人が人を支配する状況が出てくる。その支配のあり様が政治である。(六、二二、三六三―三六四ページ)この政治の変化生々の様式の分析を論じたのが、本書の第三から五部である。

この動態の分析は、政治的生活様式を有効に実践するためには、政治の過程のどの点に働きかけたらよいかを明らかにするためになされたものである(三六四―三六五ページ)。著者によれば、わたしたちの政

治生活は、それを意識するしないにかかわらず、複雑に入りこんだいくつもの要因に規定されている。そして、その規定要因を知ることによつてはじめて、わたしたちはその要因を支配することができるようになる(二一九、六二二ページ)。わたしたちは、政治の動態を知ること、政治の過程に意図的に介入し、望ましい政治的生活様式をもたらすよう働きかけることができるようになる。

著者が望ましいとする政治的生活様式は、彼が「創造的な政治」と呼ぶものである。(ちなみに、これはまた本書の書名にもなっている。)

著者の世界観によれば、「善い社会」とは、社会の一人ひとりの構成員が各自自分の環境と将来についての選択をすると、それが社会の集団としての善の増進にもつながるような社会である(三五八―三五九ページ)。したがつて、このような社会を生み出すのに役立つ政治は望ましいものとなる。それが創造的な政治である。具体的には、それは、「自分の生活を制御するだけでなく、社会の将来をも制御するような選択を行なう機会と能力を、人間がより多くもつてゐる」政治であり(一九ページ)、その結果環境の変化に対してわたしたちがよりうまく適応できるようになる政治である(三五二ページ)。

オールマンが本書を通じて示したかつたのは、彼が望ましいと考へるこのような様式の政治が、どのようにして実現可能かという点であつたにちがいない。

著者の分析によれば、政治にはつぎのような循環が生ずる。社会の果すべき正当な役割についてその構成員の間に合意があるとき、

社会は安定している。ところが、環境の変化が生じると、その合意がくずれる傾向がある。そこから軋轢が生ずる。この事態に対して策が講じられ、それが社会の構成員に承認されるとき、社会的合意がふたたび形成され、社会は安定する。(三六四―三六五ページ)。この過程のなかで、そこに働きかければそのあり様に容易に影響を与えらうと考えられる地点は、公共の政策を決定する地位にいるエリートと社会構成員一人ひとりの価値観・態度の二つである(三六五、三三七ページ)。

これらの地点に働きかけ、創造的な政治的生活様式をつくり出そうということは、具体的にはなにを意味するのか。それは、個人の価値観と生活様式、社会経済的構造、および、国家間の関係の三点とかかわつてくる。

第一の点にかかわる著者の提案・行動計画はこうである。今日のアメリカ社会——日本の社会も含めてよい——では、官僚制に典型的にみられるように、社会的な役割と期待が個人個人の目標を規定している。これは、人びとがみずから目標を定める自律的な様式的生活にとつてかえられなければならない。(三六六―三六七、三七二ページ)。

第二の点について。これまでのように、経済成長や経済の大きさを信ずることはできない。「物的な財の量よりは生活の質が社会経済的構造の善し悪しを判断する基準とならなければならない。」(二六ページ、訳では抜け落ちている。)経済は、生産と消費の能率性によつてではなく、環境を保全しながら人間の必要を満たす能力によつ

て評価されなければならない(三七二ページ)。これまで経済活動は地位をうるためになされてきた。しかし、「人は地位を必要としなさい、必要なのは他人に受けいられることである。」(239ページ)。

第三の点について。これまでの国家間関係は恐怖のバランスを基礎とし、相互に対立し競い合うものであつた。しかし、国家の相互依存性という現実を認識すれば、相互に協力し合いながら人間の必要を満たす体制が必要だということが分らう。(三六九、三七二ページ)。

著者の文脈のなかで最後に残された問題は、創造的な政治的生活様式をつくり出すために働きかけるべき地点——エリートと人びとの態度——に、右の三つの提案をいかにして受けいれさせるかである(三七三ページ)。残念ながらこの問題は、結局疑問符つきそのまま残されて本書は結ばれている。

以上が本書の論旨である。

オールマンも指摘するように、人間が自分の生活を自由につくり変えていく能力は、生活を規定する要因とその規定のし方を知り、その知識を応用してその規定関係に働きかけるところから生れる。行動論の客観的方法が総体としての知識をふやしこそすれ、無知を促進しなかつたことは、人間総体としてのこの能力の増大があつたことを意味する。問題は別のところで生じた。ひとつは、人間総体としては増大した能力が専門家の手中に集まり、一般人の側の能力の低下が生じたことである。これはすでに論じた専門家万能主義という社会制度を媒介として生じたものである。

他のひとつは、著者も指摘する瑣末主義(六一ページ)と関連する。行動論の視野から抜け落ちるのは、「行動としての研究」における行動計画づくりの基礎となる類の研究——前述の二つの研究課題——である。それは、行動論が研究の客観性・価値中立性の名の下に、行動の目標となるもの(たとえば、善い社会とか創造的な政治)をはじめに設定して、そこからとりあげるべき問題を導びき出すという手順をふまないからである。

右に論じた意味での論理のあいまいさは指摘しなければならぬが、オールマンの「行動としての研究」の主張には、私には賛同できる点が多い。ただ、自分の世界観から行動の目標を特定するところに拒絶反応を示す「科学」者が多いものと予想される。しかし、著者の論理は特定される行動の目標の内容いかんにかかわらず成立することを確認してほしい。(私が「行政学と比較的方法」(辻清明他編『行政学講座 1 行政の理論』東京大学出版会・一九七六年)のなかで展開した「装置論」の論理(同、二八一、二八五―二八六ページなど)は、その現実においてオールマンのそれと大きく違わない。)むしろ問題なのは、オールマンの政治の範囲である。彼は、個人の目標が集団の目標と対立するすべての場——家族やテニス・クラブも含めて——での行動計画づくりを引き受けようというのであろうか。

以上のような内容をもつ本書は、行動論批判の観点からなかなか興味を引くものである。その意味で本書の訳出は、日本の政治学界に確かに寄与するところがあるといつてよいだろう。

翻訳書の書評には、訳出の作業そのものの論評が含まれるはずである。

以下に述べることは、大変いいにくいことである。くわえて、それがいつの日にか、私自身に向つても切り込んでくる鋭い刃とならないとはいえない。しかし、いま社会科学の一部の翻訳文化の現状を考えると、だれかがこのような指摘を行なう必要があるだろう。

非礼の点をお許し願つてはつきりいえば、この訳書には原書のいわんとするとところを誤解曲解させる部分が多すぎる。不注意なミス、訳の欠落部分が目につきすぎる。私も、異なる文化の間でことばの違いを越えて思考の内容を伝達することがいかにむずかしいかを、よく知つているつもりである。それでもなおいつておきたいのは、訳本として一般読者の手にわたるからには、そのむずかしさのゆえの誤りが一定の範囲内に納まる程度のもでなければならぬのではないか、という点である。

不注意なミスの例は、訳書四七および五四(原本28および34)ページにある。訳者は *casual observations* 「組織的でない観察」を *causal observations* 「因果的な観察」ととり違えている。思い違いといえればそれまでのことだが、因果的知識が組織だつた観察からえられることが多いことを考えると、原本を見ていない読者にとつてこれは軽くない誤りであろう。

単語・句・文章の訳し落しも散見される。著者の主張の重要な部分にあたる文章で訳し落されている例として、原本236(訳書三六七)ページのものをすでに指摘したが、他にも訳書九一ページに原本55ペー

ジの *We have lost our ability to criticize the experts.* が抜けている。論旨にかかわらない部分での欠落もかなり見られる。このような欠落のなかには、文章の意味を変えてしまつたり(たとえば、訳書三七―三七二ページにかけての「社会生活の意味は、原本29ページの *the meaning of individual lives in the society* である」) 文脈をあいまいなものにしたたり(たとえば、訳書三七五―三七八頁目上から二、三頁目の間には、原本24ページの *Education must be a process of experimenting to find oneself and a compatible life style.* が入る)するものまでが出てくる。

思い違いや欠落のミスは、二人以上で読み合わせをすれば、大方は発見できるものである。訳出を急ぐ(三八四ページ)のは勝手であるが、そのしわ寄せを一般読者にもつていくようなやり方は納得できない。

また、訳文がそれ自体として意味をなさなかつたり、文脈が通らなかつたりしたときは、十中八九訳の誤まりだと考えるのは、翻訳のイロハではなからうか。たとえばこれはどうであろう。訳書七六ページのつぎの文は意味をなすといえようか。

「Aグループ(リーダーがいる)もBグループ(リーダーがいる)も変化を示さず、また対照グループ(リーダーを欠く)も変化しない……したがつて、われわれの結論は、リーダーシップが追従者の意見にたいして強い影響力をもつ、というものになる。」
原本46ページの原文をつぎに示す。"... both Group A and B showed changes and... the control group did not. Therefore,

our conclusion would be that leadership does have an impact upon followers' opinions.” オールマンの議論を紹介するなかで私が原本を引用したのは、訳書その部分が訳訳だからである。

加えて、誤訳とはいえないが、著者の論旨を充分正確に伝えるという観点からはきわめて不適切と思われる訳の問題もある。すでに紹介したように、著者においては collective goals 「集団としての目標」と individual goals 「その集団を構成する個々人の目標」の対比が重大な意味をもつ。したがって、本書における individual なる語は、この対比を示唆するような訳がつけられることが望ましい。その意味で、「村の住民は、村全体が存続してゆくために、自分たちが追い求めている大切なもののある部分を断念しなければならなくなる」(訳書一〇ページ、原本マヘーシ “Clearly, the individuals in the village would have had to give up some portion of the valued goods they sought in order for the village as a whole to survive.”) の「住民」や、「人間自身の生活と将来にかんする決定作成に人間が意味のある参加をしない善い社会がある」(訳書三五七ページ、原本 20 ページ “we find a good society in which individuals are not meaningfully engaged in making the decisions concerning their own lives and futures.”) の「人間」は不適切である。

以上の指摘は、目についた多数の訳出上の問題点のなかの、著者の論旨の理解にかかわるといふ意味で重大なものから、さらに限られたいくつかをとりあげたものである。結局のところ、本書評の前半に述べておいた原著の翻訳に価する意義は、訳書を通して接する

一般の読者には、きわめて理解しにくいものになつてゐるはずである。その意味でこの訳出は、残念ながら失敗であつたといわなければならぬであらう。

後半のはじめに記したように、非礼に及んだ点があればお許しいただきたい。私の真意が訳者の求めている「読者諸氏の好意あるご指摘」(xi ページ)のひとつであることは、私の親しい先輩と同僚を含めた訳出者の諸氏にはお分りいただけるものと信じている。

(而立書房、一九七六年、三八四 + xi ページ)

(一九七六・六・二九) 根岸 毅